

認知症の早期発見と予防への嗅覚機能検査の有用性

浦上 克哉

鳥取大学 医学部 認知症予防学講座（寄附講座）

認知症をきたす代表疾患であるアルツハイマー型認知症（AD）では記憶障害が出現する前に嗅覚障害が出現する。病理学的にも嗅神経に早期からアミロイド β 蛋白が蓄積することが報告されている。早期に、この嗅覚障害を発見し病気の進展を防ぐことが期待される。そこで、短時間で負担なく施行でき、有効性が期待できる嗅覚スクリーニングキットであるニンテスト（小林製薬）を開発した。嗅覚機能検査は認知機能検査より被験者の抵抗感が少なくスクリーニング検査として優れていると思われる。本邦でも抗アミロイド β 抗体薬が認可され MCI から軽症の AD 診断が求められている。現在進行中の治験においては、MCI よりさらに前段階である Preclinical AD が対象となっている。我々は厚生労働省の認知症の早期発見・早期対応モデルの確立に関する研究（J-DEPP 研究：研究代表者 荒井秀典先生）に参加し、一昨年鳥取県琴浦町と島根県隠岐の島町で、昨年は鳥取県北栄町で嗅覚機能と認知機能を調査した。認知機能は低下していないが既に嗅覚機能異常を認める方が約 6 割あることを見出した。MCI から Preclinical AD を早期に見つけるために嗅覚機能のスクリーニング検査の活用が認知症予防の切り札になる可能性がある。